

「7日間ブックカバーチャレンジ」

(2020.5.5～2020.5.11、Facebook 上に投稿)

原野 昇

第1日 (2020.5.5)

小林 茂『薩摩治郎八ーパリ日本館こそわがいのち』(ミネルバ書房、2010)



このチャレンジのバトンを私に渡してくれた町井且昌さんと知り合ったのがパリの日本館。パリの国際大学都市の中にある日本館を建てたのが、「バロン（男爵）薩摩」と呼ばれたこの薩摩治郎八（1901～1976）氏。先代、先先代が築いた巨万の富を、一代にしてフランスで使い果たした大富豪として知られる。（その額、10年間で600億円とも言われる。）

しかし見事なのは、その使い方である。上記の留学生宿泊施設・日本館の建設だけでなく、藤田嗣治をはじめとする画家や音楽家などの支援にも惜しみなく私財を投じ、フランス上流階級から敬意をもって遇され（だからこそバロンと尊称された）、フランス政府からレジオン・ドヌール勲章も授与されてる。筆者は1967～1970年のパリ留学時代に、来仏された治郎八氏に2度

お会いしたことがある。

本書の著者・小林 茂氏は、フランス語教員仲間であるが、日本館館長を務めたことがある。（1993～1996年）

今日のバトンは、バトンを私に渡してくれた町井さんと同様、日本館仲間の、敬愛する鈴木覺さんをお願いします。

第2日 (2020.5.6)

【企画・構想】中村良夫『都市を編集する川—広島・太田川のまちづくり』(溪水社、2019)



広島市は太田川が瀬戸内海に注ぐデルタに造られた都市であり、市内を6本（以前は7本）の川が流れている。原爆ドーム横を流れる元安川やその上流の川岸は、日本でも有数の心安らぐ親水川岸となっている。

その護岸工事を先導したのが本書の企画・構想者の中村良夫さんである。（中村さんは、「ブックカバーチャレンジ」のバトンを原野に渡された町井且昌さんの大学時代の後輩であり、原野とパリ留学同期の1967年組である。）

建設省（当時）の海や川の護岸工事と言えば、もっぱら災害対策としての治水思想のコンクリート工事しかイメージしていなかった。特に田中角栄首相が唱えた日本列島改造論の1970年代はそうである。そんななかにあって中村さんたちは、そこに暮らす人々の心の

安らぎとしての風景を重んじる護岸工事を主導したのである。建設省、大蔵省（当時）、市の担当者を向こうに回しての説得努力は相当なものであったろうことは想像に難くない。

中村さんは「風景学」という新しい研究分野を開拓した人として知られる。（『風景学入門』中公新書、1982、『風景学・実践篇』同、2001）

本書を出版したのが、大学時代の友人・木村逸司さんが社長を務める広島の溪水社であることも嬉しい。

今日、「ブックカバーチャレンジ」に参加していただく人として、中・高・大学の同級生、高田忠彦さん、よろしくお願いします。

（次ページにコメントあり）

コメント

畠山清子→原野 昇

中村良夫氏の「基町環境護岸」ポプラの木を保護し湾曲した河岸、強く環境意識を象徴する設計に、敬服しております。

当のポプラは、台風により倒木いたしましたが、今、ひこばえが力強く成長しております。

原野 昇→畠山清子

基町河岸のポプラは、近所に原爆スラムがあった頃から、何代にもわたって住民に親しまれてきたようですね。

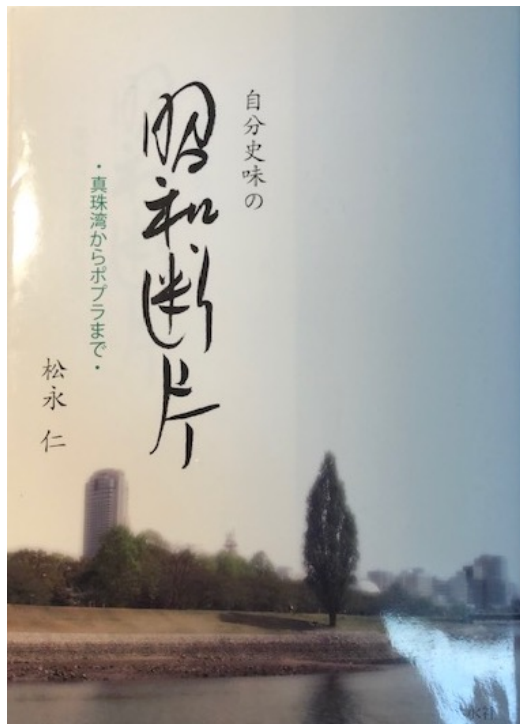
先輩・松永仁氏の『自分史味の 昭和断片—真珠湾からポプラまで』（溪水社、2009）という本の中に、「ポプラが語る日」という章があり、その中の一節に、「かれポプラ太郎は、昭和五十五年くらいまで、次郎と並び立っていた。河岸の設計を依頼された中村良夫先生は、二本とも残したかった。残すためにデザインをなんどもやりかえた。けれども河岸に課せられた法の規制によってやむなく次郎を切った。」

（p. 472）という箇所があります。

畠山清子→原野 昇

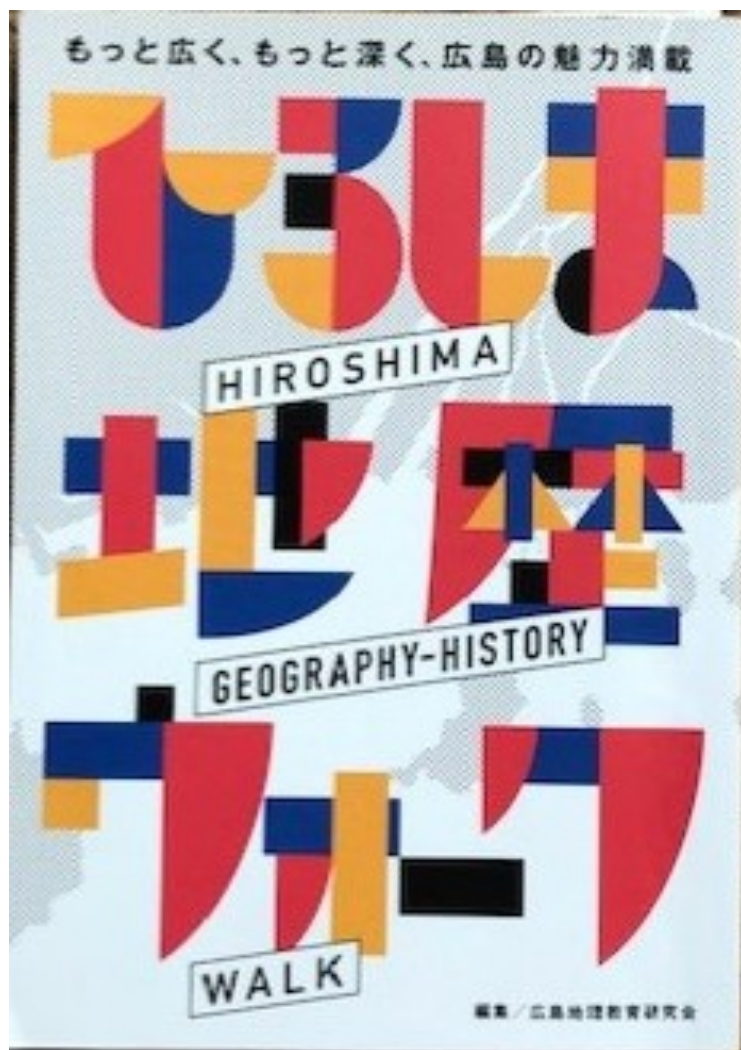
あの辺りが遊び場であった小学生の頃の記憶が、微かに懐かしく蘇ってきました。

ポプラの木一本、広島では、特別な想いで受け止めております。



第3日 (2020.5.7)

広島地理教育研究会編『ひろしま地歴ウォーク』(2018)



「デルタの街を歩く」「広島を歩く」「カープの街を歩く」の章以外に、「“廣嶋”を歩く」「“ヒロシマ”を歩く」「“ひろしま”を歩く」という章がある。“ ”でくくられて強調されているところからも想像されるように、広島町の地名は、表記に意味を含めて使い分けられているのである。したがって、書名にひらがなが選ばれているのも、そのことを意識しての結果であろう。

「“ひろしま”を歩く」の章に、「基町（もとまち）の水辺を歩こう」という節があり、そこで、昨日紹介した『都市を編集する

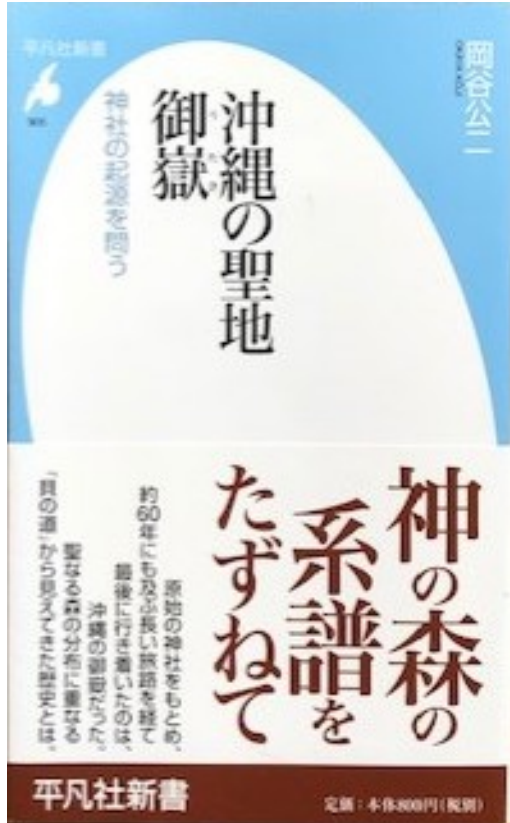
川—広島・太田川のまちづくり』の企画・構想を担当した中村良夫氏の名前が紹介されている (p. 133)。

続く節のタイトルは「日本で初めて！水辺のカフェテラス」である。パリの街中のカフェには比ぶべくもないが、公共用地でカフェという私的営利事業が、日本の法制度のもとではなかなか難しい問題を乗り越えて、実現されているのである。これも、日々の生活の中における景観の重要性を主張した中村さんたちの考え方の延長線上に位置付けることができよう。広島ご訪問の機会があれば、オープンカフェに立ち寄られるのも一興であろう。

この「ブックカバーチャレンジ」に参加していただく人として、今日は本書の編集・執筆に重要な役割を果たされた、勉強会仲間の田中泉さんをお願いします。

第4日 (2020.5.8)

岡谷公二『沖縄の聖地 御嶽(うたき)―神社の起源を問う』(平凡社新書、2019)



1967～70年のフランス留学時代、パリの日本館の原野の部屋で、同じ分野の仲間、鈴木覺、福本直之氏の3人で、フランス中世のテクストを読む会を毎週開催していた。1968年5月事件勃発、通っていたパリ大学(ソルボンヌ)が封鎖されたので、読書会はしばらく毎日開催となった。

翌1969年に、慶応義塾大学の松原秀一先生が、パリ第3大学(元東洋語学校、現フランス国立東洋言語文化学院、INALCO)の日本語教員として赴任されてきた。以降は松原先生にも読書会に加わっていただき、親しくご指導いただいた。それ以来、松原先生には数えきれないくらいお世話になった。

本書の著者・岡谷公二氏の著作を知ったのは、松原先生の推薦によってであった。岡谷氏と松原先生とは、慶応幼稚舎以来のご友人同士であった。2014年に松原先生が永眠され、『流域』

(京都、青山社刊)誌上で松原先生の追悼特集を組んでもらった際、岡谷公二氏にも寄稿してもらった。(75号、pp. 30-33) (1979年の創刊以来40年にわたって親しまれてきた『流域』誌が、編集者・保野岳人氏の永眠[2020年4月]により、次86号[2020年5月末刊行予定]をもって突如終刊となることは惜しみても余りある。)

松原先生に勧められて読んだ岡谷公二氏の「南の精神誌」には、日本人の祖先の南方的要素について非常に強い印象を受けた。

沖縄には一度しか行ったことがなかったが、本書を読んで(2019年3月頃)、今度沖縄に行く機会があったら、ぜひいくつかの御嶽(うたき)を訪れてみたいと思っていた矢先、広島で毎月行っている中世史勉強会を、2019年8月に沖縄で開催しようということになった。元のメンバーの一人が沖縄の大学に勤めていたからであるが、全くの偶然から本書を読んだ直後に、那覇市内の御嶽を訪れるという幸運に恵まれ、ほんの僅かではあるが御嶽をこの目で見ることができ、本書の理解を少し深めることができた。

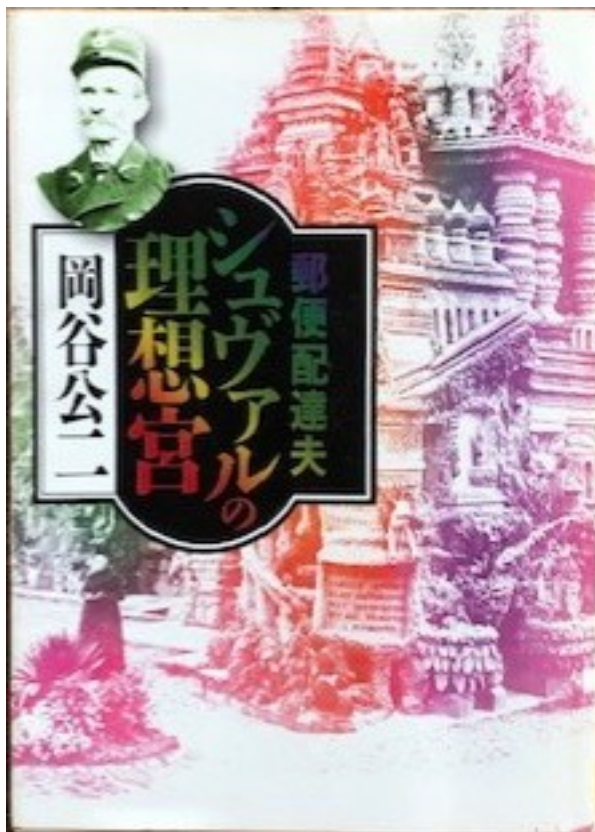
この「ブックカバーチャレンジ」に参加していただく人として、今日は、いつもユニークなつぶやきを原野のホームページに寄せてくれ、「つぶやけノボル」とい

う渾名を進呈してくれた、「フランス語テキストを読む会」の仲間・マリマリ姫こと佐々木真理さんをお願いします。（ホームページの「CAROTTES」欄、<https://home.hiroshima-u.ac.jp/nharano/KakonoTubuyaki.html>）

第5日（2020.5.9）

岡谷公二『郵便配達夫 シュヴァルの理想宮』（河出文庫、2001）

（本書は、1992年に作品社から出版された単行本が文庫化されたもの）



中・高・大学の同級生が東京から広島に帰ってきて、「コミュニティ・アカデミー上幟」を生涯学習の拠点として創設した。

（<https://manabi-kaminobori.com/index.html>）（上幟（かみのぼり）というのは広島市内の町名）

その講師を引き受けていたある日、フランスへの学習旅行を企画してくれないかと依頼された。広島からフランスへの学習旅行なら、ナチスドイツによって村民のほぼ全員が虐殺され（1944年6月10日）、一日にして廃墟と化した町を翌年訪れたド・ゴール大統領の発意で、町がそのままの形で保存されているオラドゥール（=シュル＝グラヌ）を抜かすわけにはいかない。

同アカデミーで担当していたフランス中世文学と言語学に関連深い

訪問地を、オラドゥール近辺で探し、コンクとラスコーを加えた3箇所を中心とする「フランス南西部への旅」とすることにした。（そのほかに、カルカソンヌとロカマドゥールも加えていたが、出発前日の台風被害のため関空から出発できず、成田発に変更になった結果、トゥールーズ着が半日余り遅れたため、カルカソンヌ訪問は割愛せざるを得なかった。）

（<https://home.hiroshima-u.ac.jp/nharano/FranceRyokou.pdf>）

旅行に先立って事前講座が計画され、そのうちの1回がラスコーの洞窟壁画についてであった。（https://manabi-kaminobori.com/2018_sp_3.html）

人間が「内なるものを『表』に『現』す」という「表現」行為が、時空（今、

ここ)を超えた相手への伝達手段としての文字が発明される以前から行われてきた証拠として、絵による「表現」(具体的にはラスコーの洞窟壁画)を取り上げ、そこにはどのような「内なるもの」が表されているのだろうか、絵を見る者(相手)にどのようなメッセージを伝えようとしたのだろうか、というようなことを話した。

講義の最後に余談として、イギリス、マーゲイトの貝殻洞窟とフランス、リヨンの南にあるシュヴァルの理想宮について紹介し、ある人間が行なった表現行為の結果として現存している貝殻洞窟や石の宮殿を前にすれば、それを造った人間はいかなる「内なるもの」に衝き動かされてそれらを創り上げたのだろうか、と問わざるを得ない、というようなことを付け加えた。

後者は、いつ、誰が、創造したのかが分かっているが、前者は、それがまったく不明である。('貝殻洞窟'や'シュヴァルの理想宮'がどういうものなのかは、インターネットで調べていただければ、容易にお分かりいただける。)

旅行参加者の一人は、フランス旅行の最終日に旅行団を離れ 10 日余りのイギリス旅行を計画していたが、その旅程に急遽マーゲイトの貝殻洞窟訪問を追加された。

紹介した当の原野自身は、いずれも実際には見たことがないが、以前から興味はもっていた。DNC(大学入試センター)仲間の石井洋二郎さんも、その著書『美の思索—生きられた時空への旅』(新書館、2004)の中で、一章を割いて後者を紹介(思索)している。(第5章 石の迷宮—オートリーヴ シュヴァルの理想宮殿)

なお、「フランス南西部への旅」参加者の感想記や写真、オラドゥール訪問記、およびオラドゥールの悲劇を小説仕立てで紹介した、原野の先任者、元広島大学フランス文学教室主任・杉山 毅先生の「緑の中の廃墟」、その読後感想文や書評などが、原野のホームページの「コミュニティ・アカデミー上臈」、「オラドゥールの悲劇」のページで見ることができる。

(<https://home.hiroshima-u.ac.jp/nharano/>)

今日カバーを紹介している本の著者が、昨日紹介した『沖縄の聖地 御嶽(うたき) — 神社の起源を問う』の著者と同じであることは、まったくの偶然に過ぎない。

今日この「ブックカバーチャレンジ」に参加をお願いする相手としては、「コミュニティ・アカデミー上臈」における原野の余談に関心を抱き、「フランス南西部への旅」終了後のイギリス個人旅行の機会に、マーゲイトの貝殻洞窟までわざわざ身を置きに行かれた、「コミュニティ・アカデミー上臈」の友人、浜本雅之さんをおいてなかろう。浜本さん、よろしくお願いします。

第6日 (2020.5.10)

川添 愛『聖者のかけら』(新潮社、2019)



フランス中世の羊皮紙に日頃から興味をもっているので、ウンベルト・エーコの『薔薇の名前』にはぐんぐん引き込まれ、ヨーロッパ中世の世界に飲み込まれていった。

(もっとも、映画の方を先に観たのであるが)

このたび友人から奨められて本書を手にしたのだが、聖遺物争奪をテーマにするヨーロッパ中世のキリスト教世界にたちまち飲み込まれた。しかも『薔薇の名前』と違って、著者は日本人なのである。現在広島の中世史勉強会仲間の間でも話題になっており、疑問点や補足コメントがメールで活発に交わされているが、みなさん一様に著者の博識や巧みさに感心しておられる。筆者も同様である。

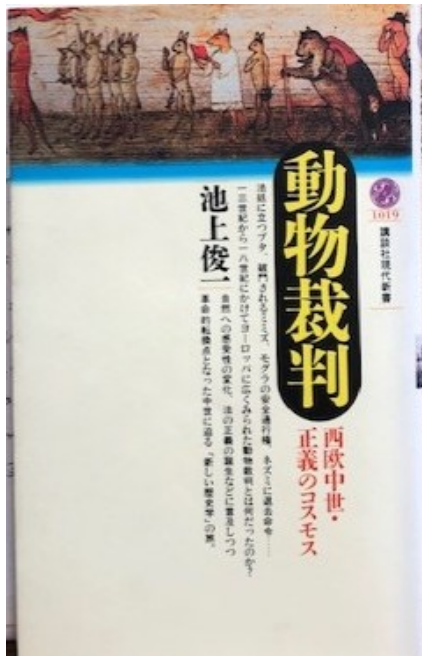
昨日の「ブックカバーチャレンジ」の中で言及した「フランス南西部への旅」で訪問したコンクも、アジャン（コンクから約 140km 西）にあった聖女フォアの遺骨を盗み出して宝物とした結果、巡礼者がわんさと押しかけるようになったと言われている。コンクの修道士は身分を隠してアジャンの修道院に入り、10 年をかけて聖女フォアの墓の見張りを任されるほどの信用を築き上げた上で盗みを決行したのである。

(<https://home.hiroshima-u.ac.jp/nharano/TsudoiTsudotte.pdf>)

今日この「7 日間ブックカバーチャレンジ」に加わってほしい人は、APEF（フランス語教育振興協会）仲間、かつかつての DNC（大学入試センター）仲間の北山研二さん、この場での突然のお願いですが、よろしくお願いいたします。

第7日 (2020.5.11)

池上俊一『動物裁判』(講談社現代新書、1990)



フランス、ブルゴーニュ地方のある村で、5歳の男の子が豚に突撃され噛み殺された。1456年12月のことである。豚は「現行犯逮捕」され、翌1457年1月裁判が開始され、有罪が宣せられ、裁判所内のカシの木に後ろ足で吊るされ、死に至らしめられた。その一部始終が裁判記録として書き残され、史料として今に伝わる。

このような史料を目にした著者・池上俊一氏は、「この奇妙な動物裁判を・・・理解するには、法や裁判制度の歴史だけでなく、それが展開した時代の文化と社会全体の趨勢、とりわけ、自然と文化、自然と人間の間をほりさげてみなければダメだ、と考えるようになった。」(p. 16) その掘り下げの結果が本書である。

中世ヨーロッパにおいて、処罰の前に「裁き」という手続き(その際には、裁きの拠り所と

なる「法」が前提される)が重んじられているということは、『ロランの歌』のような文学作品においても指摘できるところであるが、それが人間以外の動物や物にまで適用されていることには、誰もが興味をそそられるところである。

筆者自身も本書に刺激を受けて、「東の鐘と西の鐘—<処刑>をめぐる」という一文を発表したことがある。(『流域』76号、2015、pp. 58-64、77号、2015、pp. 42-46)

狐ルナールの悪だくみの話を集めた『狐物語』の中の挿話の一つは「狐の裁判」と呼ばれるものであり、百獣の王ライオンがあらゆる動物たちを召集して会議を開いている。このような設定が構想されたのも、裁きが中世のフランス社会において身近であった証拠であろう。(ちなみに、文豪ゲーテの作品のなかで、日本に最初に紹介された『禽獣世界 狐乃裁判』(井上勤訳、1884年)は、フランス中世の『狐物語』の流れを汲むものである。)

本書を読んで興奮していた1990年頃、まさか20年近く後になって、著者の池上俊一氏から、氏が佐藤彰一氏らと編集された「ヨーロッパの中世」全8巻(岩波書店、2008-09年)の第7巻『芸術のトポス』の執筆を依頼されようとは夢にだに思っていなかった。不思議な縁である。

<https://www.iwanami.co.jp/book/b257729.html>

<https://steenstrup.blog.ss-blog.jp/2009-04-26>

ついに「7日間ブックカバーチャレンジ」終了。読んでいただいた方、ありがとうございました。

そこで今日は、原野のFacebook 友だち全員に、このチャレンジに参加していただきたいと思います。もちろんそれだけの時間がある人のみでいいですし、現在多忙な人は、後日時間が取れるようになられてからで結構です。また、すでに7冊のチャレンジを終えられた方あるいはチャレンジ中の方は、終了後ひと休みされ、もしよければ再度のチャレンジを試みていただければと思います。そのための原野ルールは以下のようなものです。

「7日間ブックカバーチャレンジ」（原野ルール）

- ①好きな本の表紙の写真をアップし、簡単なコメントを付加する。（内容紹介はあってもなくてもいい）
- ②毎日1冊、7日間投稿する。（毎日でなくても、2・3日に、あるいは1週間に1冊でもよい）
- ③1冊紹介するたびに、Facebook 友だち1名を招待して、チャレンジに参加してもらう。（スルーOK、友だちを指名してもしなくてもよい）